

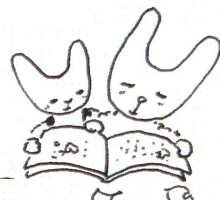


学校図書館

司書だより

NO.51

2025年10月



紙と読書

読書と私

水口 順道

<母と読書>

父を病で亡くしたのは四歳の時だった。母が私と二歳上の姉を育ててくれた。母は私が小学校三年生の夏頃から借店舗で小さな店を始めた。焼きそばやお好み焼き、夏はかき氷に冬はおでん、そして駄菓子を売る小さな店だった。経済的に苦しくわすかな収入で翌日の生活費を生み出すという日々だった。そんな中でも読書好きだった母はいつも手元に本を置いていた。とりわけ時代小説が好きだったが、本であれば少々難しい内容であっても片端から読む人だった。私が高校一年生の折に図書館で借りてきて読んでいた『徳川家康』（山岡荘八）という本を私の机に見つけた母は知らぬ間に読み出していた。あつという間に母は私が読むスピードを追い越した。いつしか何十巻もあった『徳川家康』を母のためだけにせせと高校の図書館から借りてくるはめになった。吉川英治の『三国志』はその後母に見つからないよう隠れて読んだ。私の時代小説好きは母の影響だが、それよりも時間さえあれば本を読むという私の習慣こそ母の影響と思われる。一文字でも活字を読んでもからしか寝られないのがまさにこれである。時代小説は相変わらずである。『竜馬が行く』の司馬遼太郎、『蝉しぐれ』の藤沢周平、『柳生兵衛助』の津本陽、『鬼平犯科帳』の池波正太郎……。最近では『あきなき世傳』の高田郁。何度読んでも飽きない。

<姉と読書>

四十歳でこの世を去った姉を思い出す。やはり母からの影響であろうか二歳上の姉も読書好きだった。中学時代、私は姉の本棚にあった本を読むことを覚えた。まずは『モン・メリの赤毛のアン』に熱中した。知っておられるだろうか。『赤毛のアン』は全十巻あるのだ。姉は全てそろえていた。面白くて仕方がなかった。勉強もそっこのけ

で姉の所蔵していた本を貪り読んだ。エミリー・ロントの『嵐が丘』、パールバックの『大地』等今もその頃の感動が蘇ってくる。読書の幅を広げてくれた姉に感謝している。

<貧しさで読書>

貧しさと読書が私の中で深く結びついている。小学校五年生の時だった。近所に一つ年下の遊び仲間S君がいた。ある日彼が、私に一冊の本を差し出し「順道君の家は貧しいからお母さんがあげやあと言ったからあげる」と言った。情けない話ではないか。私は子ども心に同情されるのが嫌だった。嫌だったのに、『漫画世界偉人集』というタイトルのその本を見た瞬間に欲しくなってしまう。あつたはずのプライドを捨て「ありがと」と年下のS君から受け取った。しかしその本をきっかけに、私は世の中の偉人と言われる人の「伝記」のとりこになった。中学校に入ってから『日本人の伝記』はおるか図書館にある『世界の伝記』を全て読み尽くした。時に涙を流し「このような生き方のできる人になりたい」と思うようになった。そして読む本の幅は広がりがシユール・ウエル又の『十五少年漂流記』やダニエル・テフォアの『ロビンソンクルーソー』等の少年冒険物からヘミングウェイの『武器よさらば』、『メルヴィルの『白鯨』などに進んでいった。中学二年生の一時期には毎日一冊ずつ読む読書オタクになっていた。苦い経験ではあつたが、S君とS君のお母さんに感謝している。

<読書と人生>

読書生活は今も続いている。伝記に感動し読み続けた私は未熟ながら「人の為に生きたい」と願うようになった。いつか自分自身の生き方に納得できる自分になりたいと思いついに至っている。繰り返し読む本が意外に多い。読み返す度に深まりを感じる。何冊読んだとかでなく自分の心が深まることに喜びを感じている。一生を通じて会える人はわずかであり、優れた人物には簡単には会え

ない。まして過去に生きた人物に会える訳がないけれどその人の伝記やその人が書いた文章を読むことはできる。なんとありがたいことが。寿命が尽きるまでに読みたい本は山ほどある。原稿を書いている暇はないのだ。(笑)

最後に私が繰り返し読んでいる何冊かを紹介したい。

- ① 思考力が衰えた時は松浦弥太郎。借り物の思考を拒絶する文筆家。『書しの手帖』編集長。『今日もていねいに』『軽くなる生き方』等。
- ② 心が疲れた時には小林弘幸。(順天堂大学医学部教授)。読むだけで自律神経が整う名医の言葉『自律神経が整う名医の習慣』等。
- ③ 脳の動きが衰えてきたと感じた時には斎藤孝。(明治大学文学部教授)。脳が刺激される。『読む・書く・語る』を一瞬でモノにする技術『読書する人だけがたどり着ける場所』等。
- ④ 心が濁ってきたと感じる時は渡辺和子。(ノートルダム清心学園元理事長)。心が洗われる。『置かれた場所で咲きなさい』『幸せはあなたの心が決める』等。
- ⑤ 読書の面白さを忘れた時には原田マハ。暫し仕事を忘れて読書に没頭できる。読み始めたら仕事がお留守に。『楽園のカンヴァス』『本日、お日柄もぐはぐ』等。
- ⑥ 生きることに意味がほやけてきたら高田郁。『連花の契り』『みをつくし料理帳』『あきなき世傳』
- ⑦ 壁にぶつかって心が衰弱し人生の目的を見失った時には高橋佳子。宗教家。実践哲学者。思想家。『心の力』『絵本』心の光を見つめる12の物語『自分を知る力』等。
- ⑧ 最後に2冊。吉田浩著『戦中派の死生観』と林尹夫著『わがいのち月明に燃ゆ 一戦没学徒の手記』。戦争で亡くなった方や苦しんだ方々が戦後世代に向けた懇願を忘れずに生きていきたい。

機会があればまたいつか。ありがとごいごいおま

水口先生は、美濃加茂市内の小学校に勤務されています。読書以外の趣味は、ガムの包み紙を収集することです。

物語の楽しさを
みのかも『声のドラマ』の会

「みのかも『声のドラマ』の会」は、文学作品の内容を的確に表現し、まるでドラマを見ているかのように聞き手作品の世界にひきこもつという朗読をめざして、一九九七年より活動を続けています。研鑽を積み、定期的に朗読会を開いて、市民のみなさんにも聞いていただいています。

会では、子どもたちとの関わりも大切にしています。その中心となる場は「みのかも文化の森」です。「こは博物館でもあるので、本物の『モノ』、コト、ヒト、場」があり、ここでこそできる体験的な学習活動があります。そこで私たちは、モノや場の中で、本物の朗読を聞かせてくれる「ヒト」ということとなるのです。

森の中にある昔の養蚕家屋を復元した「まゆの家」に一年生の子どもたちがやってきました。「こは、まるで国語で学習する「たぬきの糸車」の舞台となっている『山奥の一軒家』のようです。今ではなかなか見られない障子や板戸、かまど、土間があります。「こで、障子に映る影絵を見せながら、おかみさん姿でお話を朗読します。

「キーカラカラ、キークルクル…」心と気がつくことたぬきがやぶれ障子の穴から、おかみさんが糸車をまわして糸をつむぐ様子



をのぞいていました。「いたすらもんだが、かわいいな。…」

子どもたちは朗読を聞いたあとで、「たぬきがかわいかった」、「糸車の音がきれいだった」、「あんなふうに音読してみたい」と感想を発表してくれました。

ある日は、森の中で、三年生に「きつつきの商売」を朗読します。見上げる木々に風がわたり、鳥の声も聞こえます。目を閉じてお話を味わっている子もいます。

春のある日、二年生が森へ探検に出かける前に、スクリーンに本を大写しにして「たんぽぽ」「むしのかお」「かたはみ」…などの科学絵本を読みます。おかげで興味をもつ植物や生き物を観察することができると聞いています。



「このように、年間を通じて、様々な学習活動に関わらせていただいています。小、中学校からの依頼を受けて、朗読をするために出かけていくこともあります。また、朗読するだけでなく、作品を深く読み取って、いかに表現するかという学習に参加することもありました。

私たちの朗読が、子どもたちの想像力を引き出し、物語を読んだり表現したりする楽しさを感じるきっかけとなって、次の一冊へと向かってくれることを心から願っています。

(榊間 月絵)

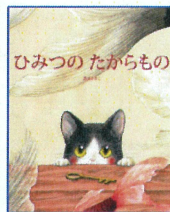
EVENT

- * 森の朗読会：毎月第三土曜日
 - * 朗読フェスティバル11月15・16日
- 於：文化の森緑のホール



『おかのうえのカステラ屋さん』
堀 直子/作 神山 ますみ /絵
小峰書店 ¥1,100

ナナのパパは、まちで人気のカステラ屋さん。ある日パパが病気で入院しちゃった。お手伝いを募集したら、やってきたのはイタチの親子。カステラの作り方を知らないナナのために、イタチの親子は自分たちがカステラに化けてお店を開きます。ちょっとずつ食べられて、しっぽや耳がなくなっていくイタチの親子。え?! どうなっちゃうの??



『ひみつのたからもの』
豊福 まきこ/作 BL出版 ¥1,650

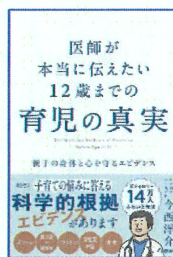
ぼくは、ネコだけがすむ村でくらしている。なかまのネコともなかよしだ。でも、ともだちにも話せないひみつがある…。じつは、ぼく、おさかながたべられない。みんなは「ネコなのにおさかながきらいだなんて、へんなやつ」という。ちがうんだ。ほんとはきらいじゃなくて…。大好きで大切にしているからこそ、お魚を食べることができないネコ。「ひみつのたからもの」を一人っきりで守ってきたネコは、ある時おなじように秘密をもつネコと出会います。



この本
読んでみて!

『医師が本当に伝えたい
12歳までの育児の真実』
今西 洋介/著 日経 BP ¥1,980

世間一般の子育てに関する説や噂は、本当のところどうなのでしょう。科学的エビデンスに基づいた安心を、医師である著者が、伝えてくれます。



『真実の口』
いとうみく/作 講談社 ¥1,650

中3の冬、湊と律希、七海は、ほこらの前にしゃがんでいる幼い女の子を見つけた。口を閉じたままの瘦せた女の子を3人は交番へ連れて行った。警察から感謝状までもらった3人だったが、心の中にはぬぐい切れない違和感が…。高校生になった3人は、再びその女の子を探すことになるのだが、親子の在り方、他人のことに勇気をもって踏み込むこと、考えさせられる一冊です。

